

人間とは、自分とは何か。人はなぜ生きるのか。わかるようでわからない、難しくも大切なこの問いに、仏教の教えをもとに迫ってこうという「人間学」。大谷大学の開学時から受け継がれている科目です。その学びとは、一体どのようなものなのでしょうか。人間学を教えている先生と、授業を受けた学生たちとの座談会を通して探っていきます。

|| 仏教を通じて人間の本質にふれる 世の中の成り立ち、そして自分を知る

山田恵文准教授▶ 人間学は、仏教の思想に基づいて人間を学ぶ、大谷大学独自の授業です。第1学年の必修科目「人間学Ⅰ」では、ブツや親鸞の思想を通して自分自身や人間について考えるところから始まります。みなさんは、授業からどんなことを学びましたか？

藤木ちひろ▶ 社会学部の私にとっては、まず仏教にふれられたことがとても大きかったです。人間学って、単に人間について学ぶと思っていたのに、いきなり「ブツの本名知って

ますか？」って聞かれてびっくり。「私、社会学部だよ？何それ、ブツに本名あるの？」という感じでした(笑)。でも、思いがけず新しい世界を見ることができて、聞いたことのある概念もあって、自分の中にあっという間にいろいろがつかまりました。

藤永樹心▶ 最初に人間学と聞いたときは、道徳の授業かと思いました。でも、「縁起」の話など、仏教を軸にした考え方にさらされておもしろかったです。高校時代はそれほど深く考えず、単純に実家が真宗大谷派のお寺だから大谷大学の文学部 真宗学科を選んだのですが、人間とは一体どういう存在なのかを考えさせられましたし、いろいろなことに関心が出てきました。

山田▶ この世のもの全てはあらゆるものと関係をもって存在しているというのが「縁起」ですね。物事はさまざまな条件があって起こる。私自身も、生まれたのは自分の力ではないし、今の私があるのも、家族の存在や友だちとの関係性、先生との出会いがあったからです。日々の新しい知見も、自分を作っ

ていく。自分自身のことや、世の中の成り立ちを正しく知るための大切な考え方です。

春末京香▶ 人間学は、人間の本質というか、ころの中にもふれる授業ですよね。自分が正しいと思っていたことも、実は間違いだったり、逆に間違いだと思っていたことが正しかったり。普段考えていることを、深く学ばせてもらった感じです。

山田▶ それまでと何か変わりましたか？

春末▶ そうですね。新しい世界にふれて、人間関係や自分のものの考え方を別の角度からとらえてみるようになったと思います。おもしろいなと思ったのが、「煩惱」の概念。人を助けようという気持ちが結局自分のためであったとか、人間は欲深い生き物だとか、ころを惑わせているものがあるとか、先生の一言一言がころに響きます。自分だけじゃなく、人ってみんなそうなんだな、って。

|| 差別、そして苦しみや死 知らないけれど知っていた世界

藤永▶ 差別するころについての授業には、

衝撃を受けました。「差別の好きな私」という冊子を紹介され、そのタイトルにまず「え？」と驚きました。差別をする人はいるけれど、自分とは違うと思っていた。それなのに、「だれにでも差別するころはある」といわれて。偏見や勝手なイメージをもつことも、差別につながることを知りました。

藤木▶ 私は「苦」や「死」の授業が印象に残っています。苦しみの種類を初めて聞いたときは、呪文みたいで何をいってるかわからなくて。でも少しずつ「それ知ってる」「それも苦しみなのか」と身近になってきた。驚いたのは「人間そのものが苦」ということばでした。

山田▶ 「四苦八苦」のことですね。生老病死が四苦。生まれる苦しみは、生まれを選べない苦しみ。既に与えられているものをどう引き受けようかという課題がそもそも人間にはあります。自分自身を嫌だと思って、それを引き受けられないと苦しみになる。他にも、愛するものと別れる「愛別離苦」、求めても手に入らない「求不得苦」など、なるほどと思うものがあるのではないのでしょうか。

藤木▶ ありますね。人間学って、知らない世界なのに実は知っていた、という感じがおもしろいです。「死」に関しては、マザー・テレサがインドに創設した「死を待つ人々の家」に興味を湧いて、それがきっかけでインドにも行きましたし、自分の関心事にまっすぐに突っこんでいたことも大きな経験でした。

|| 人間をさまざまな視点から見る、価値観や考え方を教えてくれる時間

山田▶ 私の授業では、知識を得ることよりも、自分自身に対する理解を深めることを大切にしています。人間学の学びが、自分の生き方や専門的な学びにつながるというですね。

春末▶ 自分に対する気づきもありましたし、教育学部で小学校の教員をめざしているのでも、人をいろいろな角度から見る視点を生かせそうです。人は一人ひとり考え方もやりたいことも違うので、だれかが「楽しい」と思ったことに全員を向かわせるのではなく、それぞれの気持ちを尊重しながら、寄りそっていくと思うようになりました。小学1年生から6

年生の期間はころの変化がとても大きけれど、段階にあわせて「自分とどう向きあうか」ということを大切に伝えていきたいです。

藤永▶ 人間学の授業を受けたことで、自分の考えや価値観が変わりましたね。勝手なイメージでいろいろなことをわかったつもりでいたことに気がつき、そういう考え方をすることをやめようと思えるようになりました。何に対しても知ろうとすることが大事で、はっきりとした目的がないまま大学に入ったとしても、自分が興味をもったことに積極的に取り組むことで意識が変わってくるものなんだな、と実感しています。

藤木▶ 私は、自分の世界と周囲の人の世界が交わりあうことの重要性を、あらためて考えさせられました。コミュニティデザインを学び、中山間地域のフィールドワークに出たり、自治会の勉強をしたりしていますが、地域社会というのは、

人と一緒に生きていくうえで、つい抜け落ちてしまうこと、当たり前にあるはずなのに忘れていた大切なことを、拾い集めていきたいです。

山田▶ 自分や他者を理解することは、どんな分野に進むにしても、基盤となる学びです。人間学が今後の人生にどう生きていくかは未知数ですが、ここで身につけたものの見方や、人間社会の問題について考える力を大事にしていけば、たものになるでしょう。期待しています。



藤永 樹心
文学部 真宗学科
第3学年
福岡県・三瀬高等学校卒

春末 京香
教育学部 教育学科
第3学年
大分県・日田高等学校卒



藤木 ちひろ
社会学部 コミュニティデザイン学科
第3学年
大阪府・槻の木高等学校卒

山田 恵文
文学部 真宗学科
准教授

何を学び、
どう生きて
いけばいい？

問い続けること。それが「人間学」